メディエーションデザイン

－ 空間同士の調停機能の追求

Mediation Design

■　曹　佐強　CAO Zuoqiang

愛知県立芸術大学大学院　水津研究室

Aichi University of the Arts

■　キーワード：空間、調停機能、メディエーション、接点領域

はじめに

世界は分断され，孤立化していくように見える。人間は発達の過程で自然から土地を取得し、地面をならして柵を設けて私有地とし、集合的な居住空間を形成してきた。さらに、この空間の内部に壁を設け、互いを切り離してプライバシーを守る。したがって、個々の空間の接点領域は、隣り合う人と外界との間の架け橋となる。接点領域に豊富な活動機能が生まれる。

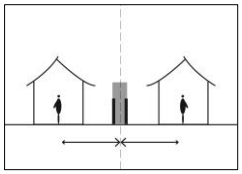
現実に存在する接点領域には、家と家の間の壁の共用、建物と建物の中庭の共用、都市と自然の相互利用のための国立公園など、さまざまなものがある。うまく利用することは多くの価値をもたらすが、うまく利用しないとスペースが無駄になる。

1.　隣り合う２つ空間境界の現状

本研究では、隣り合う空間境界の現状を「断絶」と「調整」の2つの側面から検証した。

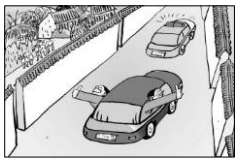
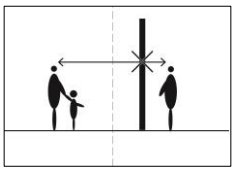
1.1　ＡとＢの没交渉＝断絶

隣接する２つの住宅空間は、お互いにコミュニケーションがとれていない。自宅境界内に壁が設置され、接点空間に利用されない空間が生まれ、空間のムダが生じている。



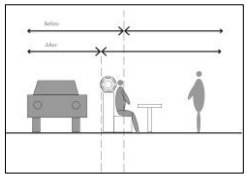
1.1.1　Ｂに対するＡの隠ぺい

国や地方は、都市の発展した一面を示すために、衛生環境や経済基盤の悪い場所に塀を設置し、観光客と都市文化の交流を勝手に遮断している。

1.1.2 Ｂの領域の拡大

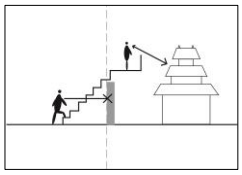
空間は調整されず、断絶したままである。歩行者の通行を改善するため、車道空間を狭める。



1.2. ＡとＢとの交渉＝調整

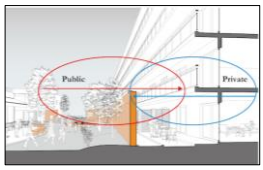
1.2.1 空中回廊

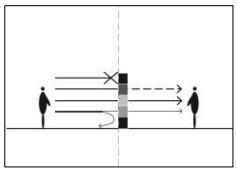
復旧工事を安全に行いながら、空中回廊「特別見学通路」を設置する。観光客が熊本城を見ることを一部許す、新たな観光資源の開拓のみならず、文化財公開に向けた新たな方法を提案する。



1.2.2 レンガ壁

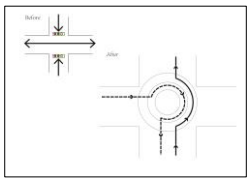
異なる用途の建物で構成される敷地をレンガ壁でつなぎ、パブリックな広場に再構成する。半透膜のような機能を持たせ、パブリック空間とプライバシー空間のバランスを取る。重なり合う境界空間を緩やかにつなぐことを目指す。





1.2.3　調整方法の変化

場所や時間によって優先順位が変化するケースもある。下図のケースでは、両方向とも同時に通過できることが求められる。

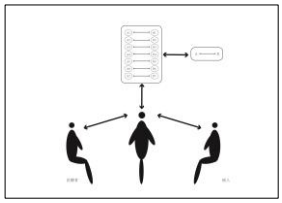


以上のように空間では様々な断絶が起こるために、それぞれに見合った調整機能が求められている。何と何をつなぐことができるのか、どんな新機能が発見できるのかを考察していく。

2 メディエーション概念.

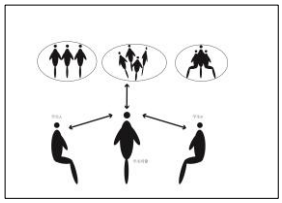
断絶や没交渉、紛争から起こる不利益を避けて、良好な関係構築に積極的に働きかける機能をメディエーション（調停）という。ここでは多様な分野においてメディエーションがどのようにとらえられているかを考察する。

医療：対話促進



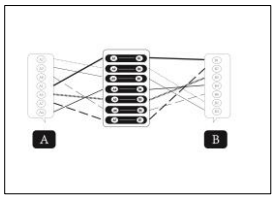
病院に患者と医療者間での意見の食い違いなどが起こった場合、問題解決に導く医療メディエーターが、単なる紛争解決や訴訟　回避ではなく、患者と医療者間の対話を促す。こうして量的な解決案を提出し、質的な解決案を収束し、これらを繰り返すことで関係を再構築していく機能を持つ。

教育：合意形成



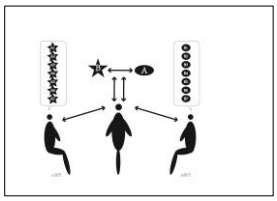
学校内で学生同士のトラブルや対立が起こった場合、双方の事情や気持ちを理解している仲間からの援助を借り、ゲームを通して両者の合意を形成し、平和的に解決する機能を持つ。

コンピューター：トランスポート



複数のシステムにまたがる業務を自動化するために、異なるシステムやサービスの間で伝達されるデータに対し、メディエーションは連携、選択、トランス ポート等の機能を持つ。

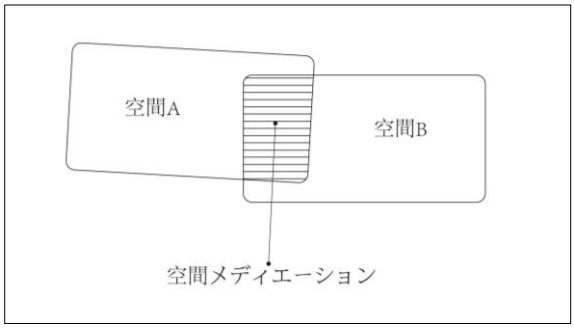
ビジネス：円滑通訳



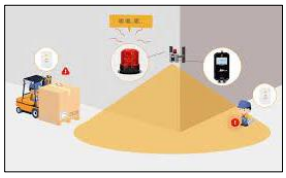
企業の中には様々な部門があり、ひとたび複数部門で話をすると、お互いに言葉が通じない状況が容易に発生する。ビジネスアナリストは、こうした状況を打開して社内のコミュニケーションを円滑にするための通訳を兼ねた仲介者する機能を持つ。

以上のように今の社会ではメディエーションの機能が重要性されている。本研究では対話促進、合意形成、トランスポート、円滑通訳の機能をメディエーション（調停）機能と考え、デザインの対象であるとする。以降は空間によけるメディエーション機能に注目し、その問題を抽出と解決するデザインを考察する。

3. 空間のメディエーション



空間で起こる断絶、没交渉、紛争、隠ぺい. . . . . .による不利益を避けて、良好な関係構築に積極的働けることが必要である。これと空間のメディエーションと定義し、デザイン研究の対象と位置付ける。



①サイン化

交差点の角に警報装置が設置され、互いに見えない方向に二つが通過すると警報が鳴る。歩行者の通行安全と運転者の通行が保証される。

②仮設性

青信号では正常に通行し、赤信号では水霧装置が作動して歩行者が通行できなくなる。歩行者の安全を確保すると同時に、快適な走行環境を作る。

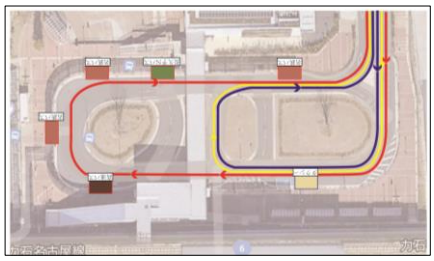
4. フィールドリサーチ

具体的なメディエーションデザインの対象としての問題と発想し。解決へ向けのケーススタディと調査を行う。

調査方法:ヒアリング調査 10 代～70 代、バス、自宅車、タクシーを待つ人。サラリーマン、学生、老人、しゃいす。まとめ 22 人。バス、自宅車、タクシー

調査日時、場所:2021.12.5、長久手市古戦場駅バスターミナル

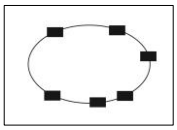
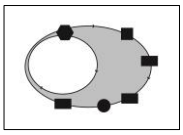
1:日進市方向バス
2:長久手市 N バス
3:名古屋名鉄バス
4:タクシー乗り場
5:愛知学院大学方向バス



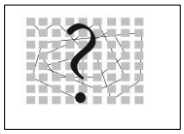
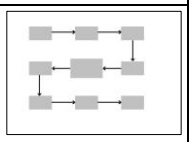
バス線路
タクシー線路
車線路

4.1 調査結果(問題)

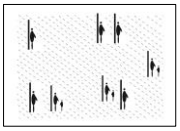
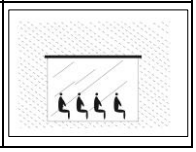
4.1.1 どこにバスがくるかわからない

問題	①:バス停がわかりずらい(10 人)②:タクシー乗り場のあいうがわからない③:方向が分からない④:総合案内図がない	
課題	バス、自家用車、タクシーの乗り場が利用者に分かりづらい。また、自宅車やタクシーの乗客がバスの 通行を妨げている。総合案内図もっと目立つにして、車向けと人向けの案内図を分ける。	
アイデア	分かりやすい車向けと人向けの案内図を設置する。	

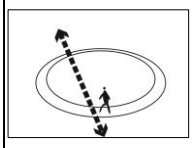
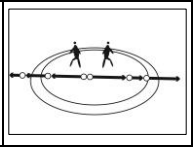
4.1.2 バス経路がりかいできない

問題	①:バス停がわかりずらい②:外国人に対しての案内図が不親切③:案内板の字の大きさ、高さが見にくい④:イメージカラーを入れて案内板が欲しい⑤:案内を大きく(声＆画)	
課題	バスに関する様々な状況分かりづらい。バスを待つ乗客が何度も運転手に質問するなど、双方に負担が生じている。人目線に合わせて分かりやすい線路案内が重要である。	
アイデア	地下鉄のような電子案内	

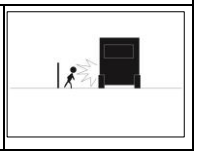
4.1.3 バスを待つ環境に対する不満

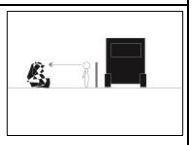
問題	①:N バス少ないから待ち時間長い(6 人)②:ベンチに座ったら立てれない③:風よけがない、寒い(12 人)④:ベンチが少ない(2 人)⑤:雨が降るとベンチが濡れる(3 人)⑥;屋根が高すぎる雨が入れる⑦:不衛生的にベンチは座りたくない⑧:荷物置き場がない⑨:バスの通行状況がはっきりしない、乗り遅れが心配	
課題	バスの通行状況がはっきりしないので、乗り遅れが心配で、通過するバスを何度も確認する。天気が悪い時は乗客が正しい乗り場でバスを待たず、運転手が乗客を把握できない。安心感がある、環境良い待合室が必要である。	
アイデア	快適な閉鎖的または半閉鎖的な環境を作成する。	

4.1.4 現地あるものが知らない

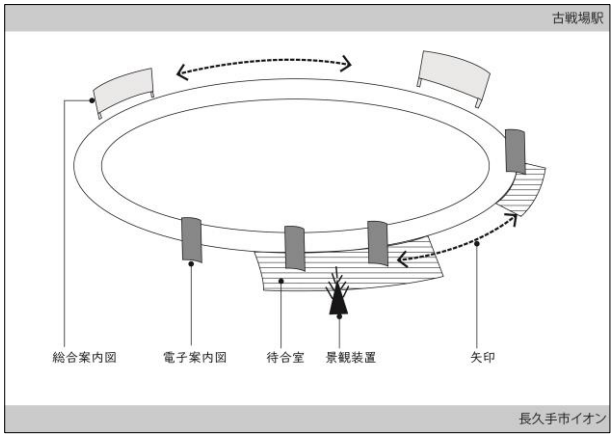
問題	①:矢印案内が無い方向が分からない(3人)②:バス停が分からない③:タクシー乗り場案内が分からない	
課題	一般車の進行方向が分かりづらく、間違って回り道をしたり、道路を横断する乗車客が多い。乗車客と運転手両方も安全負担をかかって、危険な状態である。地面や目立つ場所に矢印を設置するなど、進行方向を明確にする必要がある。	
アイデア	地面や目立つ場所に矢印を設置し、ルート方向の通過点を明確にする。	

4.1.5 年齢層に応じて施設がない

問題	①:子供が飛び出す可能性がある(3 人) ②:木を植えて子供の目を引くものなどが欲しい、何も無い	
課題	子どもを連れてバスでイオンに買い物に行く家族が多い。バスを待つとき、子供は転んだり車道に飛び出したりして、自分の安全と運	

	転手が事故を起こしやすい。子供の目を引くものが必要である。	
アイデア	フェンスを越えないようにしたり、車道に反対方向に目を引く装置物を設置し、子供の目を誘導する。	

4.2 メディエーションデザインの実践（全体的）



地下鉄の乗り換え口とイオン出入口に案内図と矢印を設置し、案内図で必要な乗り場を開口部から素早く見つけることができる。乗客利用率の高いＮバス乗り場に快適な待合室を設置し、待合室周辺に景観装置を併設することで、待機環境の向上とトラブル防止を図る。

5 ケーススタディデザイン
長久手市バスターミナル

6まとめ

主観的な部分がある。事前調査は主に休日に行われ、平日のデータは少なかった。人口分布の調査は広くなく、ドライバー側が得るデータの内容が少ない。自家用車やタクシー運転手の意見内容が足りない。あとはもっと他のドライバーの意見を聞き、より包括的な調停機能のデザインが必要になる。

両者の意見を聞き、空間的に適切な解決策を提案することは、将来的な応用の幅が広い。これは空間の新しい領域で、これは未来の都市開発、公私または他の矛盾空間の両方の問題の解決に価値があります。これから詳細な定義と方法論を提示して検証する。

他参考文献

・藤井　英二郎、「農村における公と私をめぐる異質空間の接点領域に関する考察」1983
・斉藤　一雄、糸賀　黎、藤井　英二郎、「造園における異質空間の接点領域に関する序論的考察」1985
・朴　文浩、近藤　公夫、「歴史的生活環境における境界空間の構成原理に関する考察」1987
・朴　文浩、近藤　公夫、「歴史的街区の境界空間における緑の確保可能性に関する考察」1988
・渡邊　大吾、窪田　陽一、深堀　清隆、「鉄道駅内部および外部の空間的連続性に関する研究」